

ソーシャルワーク教育が育む「ソーシャルワークマインド」の考察

ー卒業一年後のインタビュー調査の分析を通してー

○ 京都女子大学 川端(木下) 麗子 (005696)

中島 尚美 (大阪市立大学・007646)、川島 恵美 (関西学院大学・003274)

キーワード3つ: ソーシャルワーク教育, ソーシャルワークの価値基盤, 柔軟な専門性,

1. 研究目的

本研究は、ソーシャルワーク教育が育む「ソーシャルワークマインドとは」という問いに着眼したものである。研究目的は、A大学の卒業生がどのような学びを得て、さらに現職においてその学びをどのように活用しているのかを明らかにすることである。

研究の背景には、ソーシャルワーク教育において「どのような人材を育てていくべきなのか」という教育者としての問題意識がある。この問いへの方向性を見出すために、社会福祉人材養成における「評価」の一側面である卒業生の発言に着目することが、ソーシャルワーク教育の検証につながると考える。

また、本研究では、福祉専門職に限らず、一般職に就いた卒業生へのインタビューも実施し、ソーシャルワーク教育を受けた卒業生が具体的な学びとして捉えているものに対して帰納的に分析するアプローチを試みている。その結果として「ソーシャルワークマインド」につながる要素を見出すことができるのではないか、という仮説を設定した。

2. 研究の視点および方法

研究方法はインタビュー調査とした。インタビュー対象者は、A大学における社会福祉士養成課程の実習指導の同クラスに在籍した7名である。7名の進路は、一般職4名、福祉専門職が3名である。うち2名は転職を経験している。インタビューは、卒業後1年が経過した時期とし、2015年3月～5月にかけて「一般職・福祉専門職・転職」のグループに分けて実施した。インタビューはガイド（①現在の仕事内容、②仕事の中で大切にしていること、③仕事の中で大変だと思っていること、④ソーシャルワーク教育（実習教育）で身につけたことで今の仕事に活かされていること）を中心に半構造化インタビューを実施した。インタビューデータは全てICレコーダーに録音し、逐語記録から整理を行った。データ分析にあたっては、転職者も含めて、「福祉専門職」「一般職」の2つのグループに分けて行った。

分析手続きは2段階とした。一次分析においては、それぞれのグループから具体的な語りを中心として分析を行い、それぞれの特徴や共通性を見出せる内容を視点として考察を行った。二次分析においては、インタビュー内容を切片化し、そこからコードを生成しカテゴリーを抽出する作業を行い、結果についてエキスパートチェックを受けた。

3. 倫理的配慮

インタビューは「人と環境とその相互接触面の諸相に関する研究」倫理指針に基づいて行い、対象者には、調査の目的・方法等を文書で説明し書面での同意を得た。調査データは、一次分析においてインフォーマントからチェックを受け、修正箇所については加筆修正を行い、二次分析についてはエキスパートチェックの結果を反映し再度修正を行った。

4. 研究結果

分析の結果、「福祉専門職」グループから抽出されたカテゴリー【利用者理解】のコードとして「クライアントの変化の可能性」「クライアントの家庭環境の課題」等が挙げられた。同じく、カテゴリー【専門性の追求】のコードでは「共感の深さ」「支援者としての意志をもつこと」「言語化する能力」「優先順位のつけ方」「根拠のあるアプローチ」「長期的な視点」「ストレングスの視点」が抽出された。特にカテゴリー【ソーシャルワーク教育】においては、「客観的な視点」「共感的姿勢」「信頼関係の構築」「課題発見能力」「エンパワメントとストレンクス」「共感的姿勢」「自己の変化」「学びの連続性」等が挙げられた。

一方、「一般職」グループからは、【他者理解】【人の背景への視点】【実習教育からの学び】【仕事への姿勢】【仕事で活かしている力】等のカテゴリーが抽出された。

5. 考察

「福祉専門職」では、大学で受けたソーシャルワーク教育を核として、さらに【専門性の追求】を目指す姿勢と、「学びの連続性」に強調される、卒業後も学び続ける姿勢が顕著である。これは、保正がソーシャルワーカーの実践能力の要素として示す「専門的自己の確立にむけて自己を生成する」(保正 2013:197-200)ことの萌芽として捉えることができる。

「一般職」においては、【仕事の中で活かしている力】の「クライアントの個別化」「信頼関係の構築」「推察力を活かした判断」「エンパワメント」や、【仕事への姿勢】における「クライアントの最善の利益」、さらに【人の背景への視点】における「生活の視点」「人の背景への関心」等のコードは、まさにソーシャルワーク教育に源流を持つものと捉えることができる。これは、本田（2009）のいう「柔軟な専門性」に通じるものと考えられる。

本研究の意義は、ソーシャルワーク教育を受けた卒業生が、福祉専門職・一般職に関係なく、その学びを活かしながら仕事に向き合っている姿勢を確認できたことである。さらに2つのグループの共通性として、人との関係性の構築に重点を置き、人を環境の中で捉え、人への尊厳に根ざした視点で主体をクライアント側に置くという、ソーシャルワークの価値基盤が揺るぎなく存在していることが見出せたことである。このことは、ソーシャルワーク教育が育む「ソーシャルワークマインド」につながるものと考えられる。

※本研究は川端(木下)麗子、中島尚美の共同研究「地域社会における多様な担い手の創造—卒業1年後のインタビュー調査にみるソーシャルワーク教育の可能性」『ソーシャルワーク研究』Vol.41No.3 (2015)の二次分析の結果である。